The Kōbe Marine Observatory
JOURNAL OF OCEANOGRAPHY
2nd Series Vol. 6 No. 4

海 洋 時 報

第2輯 第6巻 第4號
昭和30年9月

目 次

9月の北太平洋及び其他大洋上の気象概要…… 1—15

日本及びその周辺の気象概況……………………16—19

昭和30年6月における海難………………………………20

神 戸 海 洋 氣 象 臺

9月の北太平洋及び其他大洋上の気象概要

Meteorological Conditions in the North Pacific and the other Oceans in September.

§1. 概要、気圧配置

8月に比べると次の諸点が変つて来ます。

(1) Siberia から欧洲へかけて高気圧帯が現はれ始め、8月には低圧部となつていた Baikal 湖附近は高気圧区となる。(2) 西 Pakistan 中心の大低気圧の勢力は更に弱まる。(3) 北極を囲繞する極圏低気圧域が出来、緑洲、北加奈陀では 1005mb の示度となり更に強勢となる。又 Aleutian 列島列島北方 Bering 海も 1010mb 以下の低圧部となり次第に此の方面の低気圧活動が活潑化することを示す。(4) Azores 高気圧は 1020mb と弱まりますが、北太平洋高気圧は未だ大して弱まらない。(5) 南半球中緯度高気圧帯の示度は全般的に僅かながら下り、1020 mb内外となる。(6) I.T.C.(赤道前線)は各地域において南下し始める。

これは要するに、南北西半球共季節の変換期に当るために全般的に風力は弱くなり且つ天候の変化が起り易くなる傾向があります。

§2. 9月の高、低気圧

(イ) **高気圧** §1に述べましたように中緯度高気圧は一般に稍衰えて来ます。Baikal 湖附近を中心として Siberia 北東部に時折浮動的な高気圧が出現し、早い年には本月末に台風の後面を追つて本邦附近には北西季節風のはしりが一寸顔を出すことがあるが、長続きはしません。

本邦の南東洋上を占拠していた北太平洋高気圧は東方に後退し始め台風は次第に本邦に接近し易くなり、年中最も台風来襲の多い月となる素因となります。

(ロ) **低気圧** Bering 海に冬期最も発達する大低気圧のはしりが、本月になつて出来始めます。この低気圧は統計的に広範囲な区域が気圧が低くなるので一つの大低気圧のようですが、実は本邦附近海や Siberia 東部から進み漸次発達する中緯度低気圧の到来すること繁しきために生ずるもので、比較的大区域の低気圧のものもありますが、そうでなく多数の低気圧群に分解されることもあり、常に気象状況は変化しています。大区域低気圧のときは中心附近はかなり広範囲に亘つて風力弱く天気も悪くないのが普通で、風力の強い区域は寧ろ中心より可なり遠れた周辺洋上(600浬内外)に帯状にあるのが普通です。これに反し低気圧が群をなして存在するときは個々の低気圧中心附近に烈風(風力10内外稀に12)を伴うので両系の低気圧は区別して取扱う要があります。(猶之の問題に就いて本誌12月に詳述する)



オ1図　極東地区の台風通過の回数　(1940—1954)

日本近海でも低気圧の出現は稍々殖えるがまだ発達が悪く問題視する程のものは出ません。

若し此の月日本近海で発達するものがあれば台風系のものと見て差支へありません。

§3. 熱帯低気圧

台風 極東地区に発生した台風につき最近15ケ年間のものに付き経緯1°梯形内通過回数を示しますと第1図となり、通過回数の多いのは比島東方を中心とする Mariana 群島から比島北部 Bashee海峡、台湾海峡を含む南支那海北部と、他に本邦南方洋上の小笠原群島から四国、九州にかける区域と房総より三陸沖へかける海域です。この内最も多いのは比島東方ですが、この辺は転向せず南支那海に進むものと転向して内地に迫る二種類のいづれもが通過するためです。

既往の顕著なる風を表示しますと才1表となり、それ等の経路は才2,3図です。

第 1 表 9 月の顕著台風 (2、3図にそのコースを示す) (1945—1954)

	番号	年	日付 発生		日付 消滅		発生地		最深気圧	最大風速	台風番号	最盛位置	記事
		昭和					N	E	mb	m/s			
前半期	1	29	Ⅸ	4	Ⅺ	16	19	152	910	45	5412	マリアナ諸島北東500km附近	大区域であつたが風力はその割に弱かつた。**12号台風**
前半期	2	〃	〃	4	〃	9	26	138	940	40	5413	南大東島北東 250km附近	小区域
前半期	3	〃	〃	11	〃	20	15	157	950	**50**	5414	硫黄島南 400附近	
前半期	4	28	〃	14	〃	20	17	124	970	40	5312	南支那海プラタス島附近	
前半期	5	27	〃	1	〃	8	9	138	980	40	5212	香港南300km附近	まぐろ船80°N、150°E附近で台風の為め遭難す。
前半期	6	〃	〃	15	〃	22	16	167	940	**60**	5213	19°N 166。E附近	
前半期	7	26	〃	12	〃	22	8	148	970	33	5113	ルソン島北東沖	
前半期	8	25	〃	7	〃	17	17	143	945	40～50	5029	九州南東500km附近	台風の被害大きく 1道15県に及び特に九州、四国、中国は被害大きかつた
前半期	9	24	〃	1	〃	11	20	145	970	40	4912	アリユーシアン列島中部	
前半期	10	〃	〃	2	〃	9	20	124	990	29～32	4913	香港附近	
前半期	11	〃	〃	8	〃	16	16	141	978	40	4914	沖繩南500km附近	
前半期	12	23	〃	7	〃	19	マーシャル群島東部		940	48	4821	南大東島東方 600km附近	関東、東北地方風水害
前半期	13	〃	〃	8	〃	28	13	136	960	32	4822	石垣島付近	
前半期	14	22	〃	8	〃	17	16	153	460	45	4709	潮岬南500km附近	
前半期	15	〃	〃	13	〃	23	19	160	970	40	4710	小笠原諸島東方500km附近	
前半期	16	21	〃	9	〃	20	13	155	960	**50**	4618	南鳥島附近	
前半期	17	20	〃	11	〃	23	13	148	910	**51**	4516	枕崎附近	枕崎台風、枕崎瞬間最大風速63m/s 細島同76m/s被害甚大
後半期	1	29	〃	18	〃	27	11	150	955	42	5415	北海道西岸寿都沖	洞爺丸他4隻は函館港附近で遭難する。上陸後も台風は衰弱しなかつた
後半期	2	28	〃	16	〃	29	6	153	**897**	**75**	5313	沖鳥島西南西 350km附近	被害は全国的に及んだ。**13号台風**
後半期	3	27	〃	24	Ⅹ	6	11	157	975	40	5214	銚子東方500km附近	長軸の長さ150kmの巨大な台風眼を観測す。
後半期	4	26	〃	20	〃	3	8	137	980	45	5114	台湾海峡の南部	
後半期	5	25	〃	18	Ⅸ	22	30	137	975	35～40	5033	カムチヤツカ半島南方400km附近	
後半期	6	〃	〃	26	Ⅹ	6	6	153	975	30	5035	プラタス島附近	
後半期	7	23	〃	21	〃	8	12	164	970	37	4824	沖繩島附近	
後半期	8	21	〃	17	〃	3	13	165	960	40	4619	沖繩南500km附近	
後半期	9	20	〃	25	〃	3	14	134	970	30	4518	ルソン島北東 500km附近	

8月のものと比較しますと9月の台風は次の諸点で相異があります。

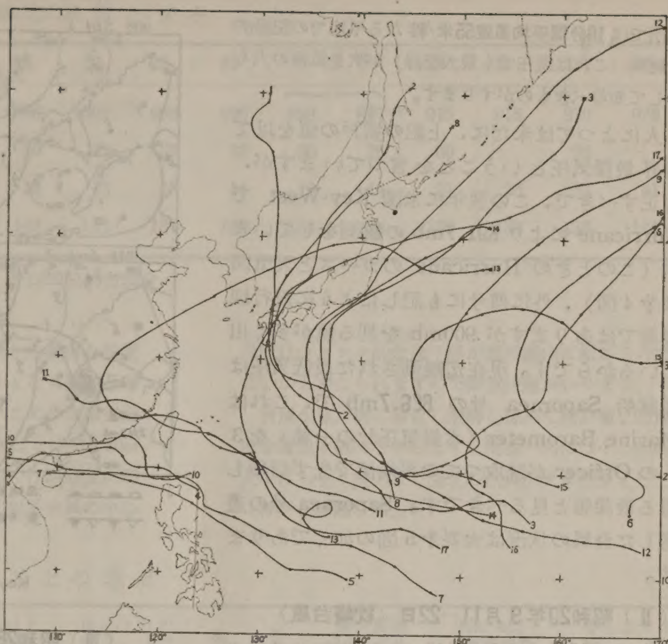
(1) 一般に内地附近では9月の方が破壊力が強い。これは風力の強いのが多いことと同時に、豪雨も伴い洪水禍を起こし易いことにも原因があります。

(2) 9月の方が転向する点が東方なため、内地え上陸する率が高くなる。

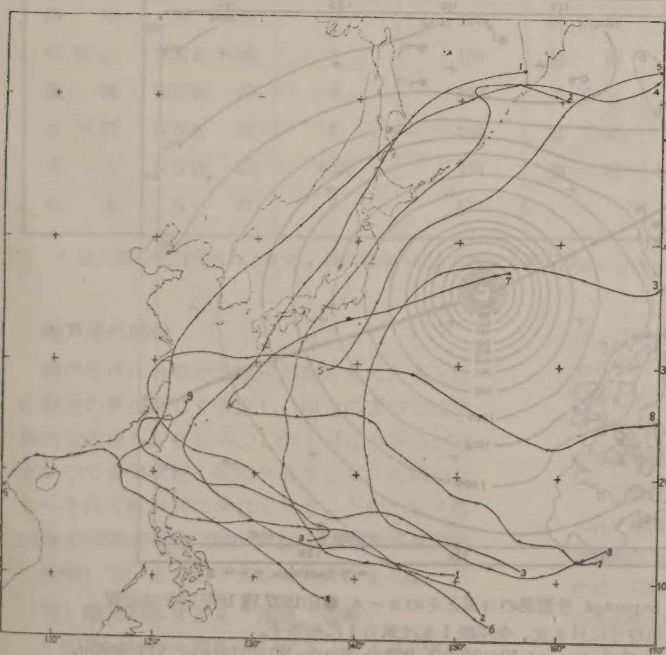
(3) 進行の速さは8月よりも大きい、特に内地に接近してから北東へ行く程増加率が大きい。

9月に出現した台風中特に顕著であつた2,3のものに就き詳述すれば次の通りです。

(Ⅰ) **昭和9年9月21日の室戸台風**



才 2 図　　9月前　の顕著台風経路図　(1945—54)



才 3 図　　9月後半の顕著台風経路図　(1945—54)

陸上測点で始めて700mmを割る低圧を観測した最初のもので、阪神間に夥しい被害を惹起した。

最低気圧、室戸岬測候所 **911.9m b=684.0mm 日本の陸上観測値の最低**

当時は飛行機観測はなく、上記室戸岬の気圧が一番低い値を測つているか、どうかは不明です、それは兎も角として始めて700mmを割る実測値が出たのと、引起こした被害の甚大さのため、この台風は画期的なものとして世人の記憶に生々しいものがあります。

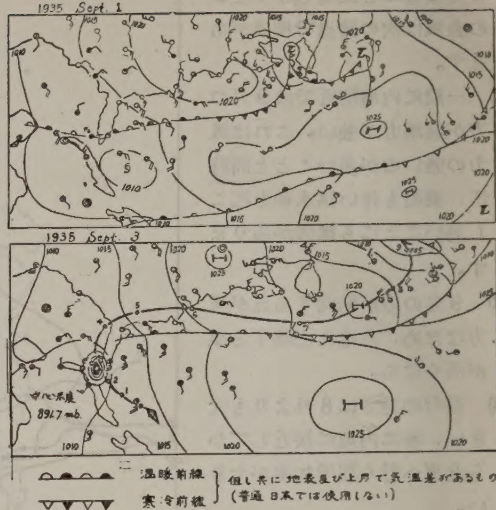
発生は南洋群島西カロリンYap島附近です。室戸岬と高知市の中間から上陸し徳島市を掠め淡路を通り阪神間を尼崎附近で北東に通過し日本海に抜け、途次高知、徳島、兵庫、大阪、京都の諸府県に莫大な被害を与へました。特に**大阪港には4米を越ゆる高潮**を起こし船舶に大被害が出ました。又大阪市の木津川尻の観

測所では**10分間平均風速55米/秒**なる平地での記録的な颶風（これは現在でも最大記録）が吹き風害の大もおして知るべきものがすります。

人によつては未だに、上記の室戸の値を以て世界最深気圧ということを言つていますが、訂正すべきで、この翌年に米国 Key-West で Hurricane により 891.7mb の観測をしています（このときの Hurricane のコースと天気図は才4図），外に前号にも記したように飛行機観測ではありますが 900mb を割る値が多く出ているからです。現在迄観測された最低気圧は和蘭船 Saporaea 号の **886.7mb** で、これは Marine Barometer（水銀気圧計の一種）を3人の Officer が読取つての平均値で先ず信頼し得る最深値と見るべきです。Saporaea 号の遭遇した台風の状況は大要才5図の如くであります。

（Ⅱ）昭和20年9月11—22日（枕崎台風）

枕崎で916.6mb とＥＳＥ40m/s を実測したＡ級台風です。被害も著しいものがありました。神戸ではＳＳＷm/s の烈風が吹走しました。

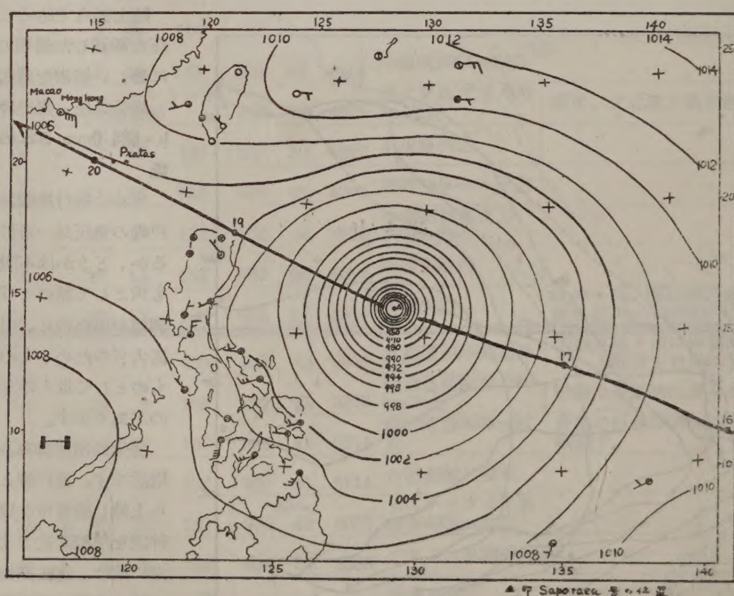


才 4 図

Key-West 襲撃 Hurricane (Scherhag)

（Ⅲ）昭和28年9月16—29日（13号台風）

被害は広範囲に亘り起こりました。中心示度は第2表の如く変化し、**最低時には897**mbとなつています。



才 5 図　　Saporaea 号遭遇の台風とそのコース ●印1927 Ⅷ 18午前6時位置
風力、天気符号は日本式、矢羽根1本は風力1に相当す。

15日Guam と Yap 島中間洋上に発生 Apprari 19日08時半 969mb, Pratas 20日03時a.m. S11 967mb 10哩以内通過，香港 20日14時 982.4mh, 26m/s, gust 50m/s, Macao 20日17時半 972mb ＥＳＥ 12 gust 190km/h,

才 2 表　毎日中心示度の変化

日	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
中心示度 mb	1008*	1005	998	1002	995	996	993　897**	915	915	930	978
最大風速 m/s	トラック南東	13　トラック島	30	25	37	32	50　75	60		35	
位置　北緯			10	12	13	14	19　19	21	26	32	41
位置　東経			147	141	137	136	134　133	133	133	135	144

* 印は21時、其他は09時の位置、**印22日13日22分

22日08時18分の飛行機観測で993mbと出た中心示度は同日13時22分の飛行機観測で897mbとなり僅か**5時間に96mbの氣圧下降**がありました。この外に南支海の辰和丸台風（エルシー台風）のときは6時間に50mbの下降があり、28年8月12日の台風では24時間に75mbの下降があつた等から見ると或る程度台風の中心示度はショック的な急下降が短時間内に起こるのではないかと考えられますので厳重注意がいります。

台風が室戸岬に接近し潮岬を掠めて熊野灘、志摩半島を通過中阪神を中心とする関西一円には中心距離の大小にあまり関係なく偏北の烈風が吹き続きました。（神戸、舞鶴、津山等）

才 3 表　25 m/s 以上の地点

地名	最大風速 10分平均 m/s	20m/s以上 継続時数 時間	中心よりの距離* km	地名	最大風速 10分平均 m/s	20m/s以上 継続時数 時間	中心よりの距離* km
神戸	N 27	6	190	伊良湖	ESE 30	不明	30
大阪	NNW 22	1	120	浜松	SE 25	3	50
舞鶴	N 26	3	220	御前崎	SSW 32	不明	110
和歌山	NNE 26	7	120	静岡	S 27	〃	90
潮岬	WNW 29	9	150	長津呂	SW 33	〃	120
室戸岬	NNE 28	7	130	富崎	SW 28	〃	150
津山	NNW 27	不明	260	勝浦	SSW 27	〃	200
洲本	N 37	5	170				

* 最大風の観測されたときの、表は25m/s以上の地点を併記す。

神戸港の特徴

神戸港港は台風や低気圧が熊野灘に入ると急に偏北の風が烈しく吹走し、場合によつては突風的な吹出しで吹始め、しかも可なり中心が遠ざかつても猶吹続く傾向があります。台風がたとへそれて阪神間に来なくても、上記の如く27m/sの烈風が吹き20m/s以上の烈風が6時間も継吹していますので安心は出来ません。

（Ⅵ）昭和29年9月4—16日（12号）

4日15時 Mariana 諸島の東 19° N, 152° E に1004mbで存在が認められ、西進し8日910mbと発達しましたが、以後内地に接近するにつれて洋上通過中にもかゝわらず示度上昇し弱まり13日15時枕崎に上陸し九州を従断して、日本海を予想を裏切つて真北へ進み浦塩より更に大陸へ入り Amur 河中流で16日低気圧となり、化身は Kamtchaka えと進行しました。

8日頃は非常に優勢なものでしたが、九州に迫るにつれて範囲は広がり、中心示度は上昇したので気圧傾度は緩となつて、見掛上は極めて雄大な姿態を呈したのに（長経150km）風力はその割に弱く室戸台風以上の暴風雨が起こるとの予想は完全にくつがへされたのは幸でしたが気象台に対する不信は強まり、ひいては次に出現した15号台風に対す警報えの軽視としてな

才 4 表

地区	最大風速 10分平均
	m/s
種ヶ島	W 28
屋久島	ENE 33
油津	SE 25
宮崎	ESE 26
手深	WSW 25
宿毛	ESE 26
足摺	SE 25
徳島	SE 32

り。被害を増大した傾向がありますのは寔に遺憾でありました。しかしそれはとも角として九州では相当の風で可なりの被害は出ています。(死者107,行方不明39,全半壊家6400,船舶沈没119同流失78)

本台風で注目される点：単に範囲の広い丈では風速の大きい事がいえない事を指した事実

（V）昭和29年9月18—27日（洞爺丸台風）

18日に Caroline 群島 Orol 島附近に発生したが、西進途次弱まり消滅するかに見えたのに23日復活し25日早朝石垣島え接近し975mbと発達し、同島でNEえ転向し同日15時頃から異常な速さ（90～110km/h）となり九州中間を斜断し日本海を経て26日21時には北海道西方に達しました。最も早かつたときには毎時110kmに達し、台風史上稀な現象を呈しました（第6表）参照）。この頃函館港で洞爺丸を始めとして数隻の中型船舶が沈没する惨事が出ました。（死者 1,361名、行方不明400名、沈没船舶925、流失800、破損3,856隻、洞爺丸丈死1,139名）

才 5 表　各地の最大風速　(10分間平均25m/s以上の)

地名	最大風速	地名	最大風速	地名	最大風速	地名	最大風速	地名	最大風速
	m/s		m/s		m/s		m/s		m/s
宮古島	S 28	福岡	N 26	呉	WNW 25	輪島	SW 26	苫小牧	S 32
石垣島	ESE 27	萩	N 32	岡山	SSW 25	新潟	WSW 26	浦河	W 28
真和志	SW 31	宇和島	SSE 28	津山	S 26	酒田	SSW 27	寿都	SSE 42
種ヶ島	WSW 39	宿毛	SSE 36	豊岡	SSE 30	秋田	SW 31	小樽	SW 28
屋久島	WSW 33	足摺	S 28	和歌山	S 25	深浦	SW 30	留萌	SW 35
草垣島	ESE 27	高知	SE 25	伊良湖	S 25	函館	S 26	羽幌	SSW 26
枕崎	ESE 27	室戸岬	S 26	御前崎	SSW 26	江差	WSW 36	北見抜幸	SW 25
油津	S 26	徳島	SE 30	大島	SW 27	森	S 30	雄武	SW 32
宮崎	SE 31	松山	S 25	金沢	SW 25	室蘭	S 37		

註：此の外にも燈台等では25m/s以上の風速を測つている。

表示風速の外に瞬間最大風速というのがあります。これは或る瞬間の風速で最大なもので上表のは10分間平均ですから、いきほひ瞬間最大風速の方が大きく、たとへば、この台風のとき各地で測定した両値の関係を図示しますと第6図となり、式で表はせば

$V = 1.4v$（但し図にも引いてありますように $V = 1.8v$ から $V = 1.1v$ の平均的関係に過ぎません）

V ＝瞬間最大風速

v ＝10分間平均最大風速（上表のもの）

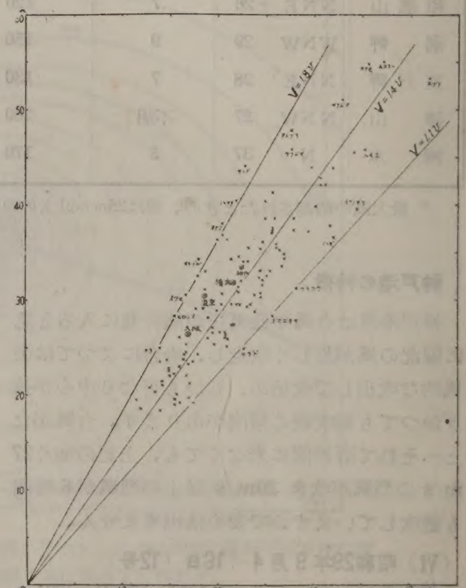
大凡瞬間最大風速の方が4割大きいということです。

本台風で注目すべき諸点

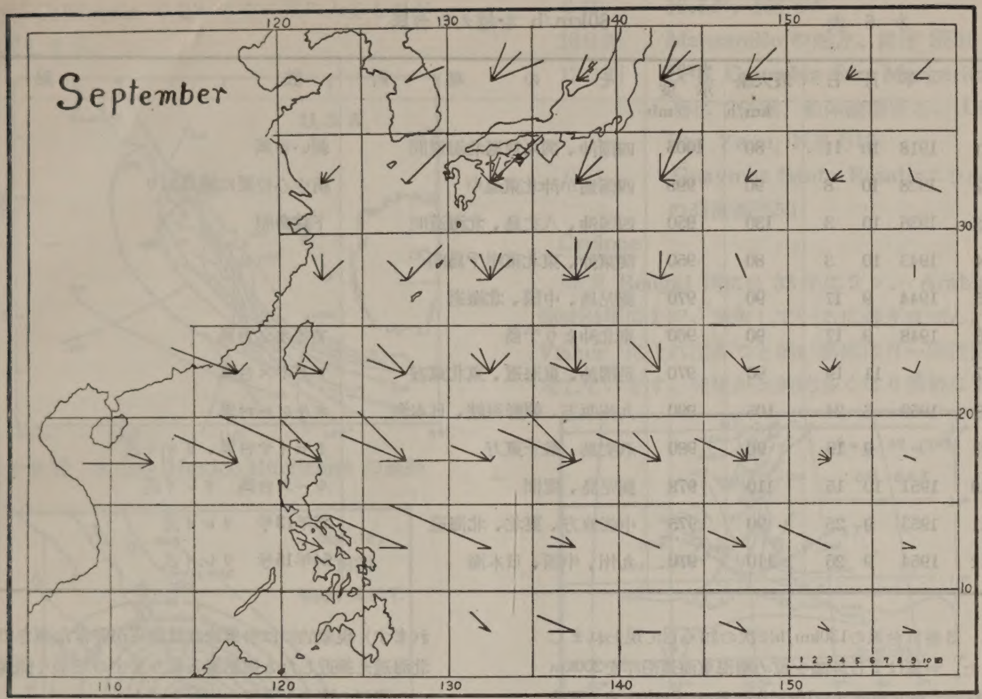
(1) 転向後著しい速さで進行した（90～110km/h）

(2) 中心示度は北え行くにつれて下り、且つ勢力も増大した。台風は普通内地を通過すると勢力の急減があるのに本台風は逆に強化された。(例は極めて稀で殆んど空前といへます)

(3) 中心示度（最深のときで955mb）の割りに広範囲に亘り風力の激烈であつた。



才6図　10分間平均最大風速と瞬間最大風速の対比図



オ 7 図　経緯5°毎の台風進路の方向別頻度

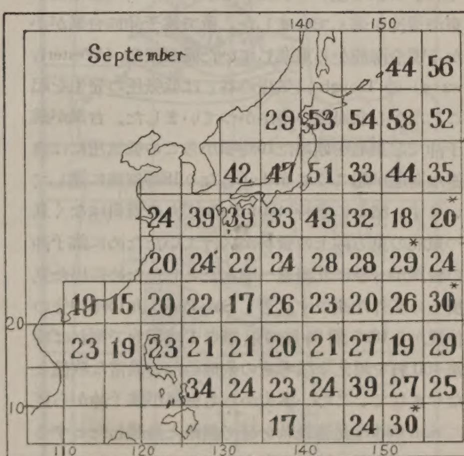
進行方向

個々の台風の経路はオ2，3図で法則化するにはあまりにも複雑且つ無系統過ぎます、このためオ7図で見当を付けるより手はありません。ただ大略的には、20°N 以南では西北西進傾向顕著で、20°～25°N 間は北西進傾向が大いが、N～NEえの進行傾向も現われ、25°～30°N では N～NE 進行傾向が更に増し、北西進傾向は著しく減じます。結局20～30°NでN～NEえ転向するものが多いといえます。30°以北ではNE進が大勢を支配しています。但し、一般に東方洋上程低緯度で北東転進が起こります。

進行速度

低緯度地方では速さは比較的一定し20km/h内外ですが、転向しＮＥ進始めると漸次速くなり、その増大率は８月に比べると著しいものがありまして（30°N 以北で特に然り）東北、北海道辺では50～60km/h となります。この傾向は10月にも引続きます。

大正年間から現在迄80km/h を越した既往例はオ6表です。



オ8図　９月台風の平均進行速度（km/h）
＊印は１～２回の平均

才 6 表　　　　　　　　80km/h を越えた台風

	年　月　日	最大速	当時の示度	そ　の　場　所	註　記
		km/h	mb		
1	1918 10 11	80	1005	四国沖、関東通過北海道間	弱い台風
2	1928 10 8	90	995	四国遙か沖北東進中	稍中心位置に疑点あり
3	1936 10 3	130	950	四国沖、八丈島、北海道間	下註参照
4	1943 10 3	80	950	関東沖、東北東岸千島間	
5	1944 9 17	90	970	鹿児島、中国、北海道	
6	1948 9 17	90	960	東北沖より千島	アイオン台風
7	〃 11 19	90	970	足摺沖、東海道、東北東方	アグネス台風
8	1950 6 24	105	990	九州西方、朝鮮海峡、日本海	エルシー台風
9	〃 9 19	90	980	八丈島、銚子東方	ミセイサ台風、リレイ式
10	1951 10 15	110	978	鹿児島、境間	ルース台風　リレイ式
11	1953 9 25	90	975	中部地方、東北、北海道	53年13号　リレイ式
12	1954 9 26	110	970	九州、中国、日本海	54年15号　リレイ式

註　3番目台風の130km/hは次の如くして現われました。台風は2日沖縄を掠め南海東海道沿岸を200km離れて東北東進3日16時10分 Ban Pedro 丸（石井明船長）は銚子東方 100km（35° 45'N, 142°00E）で眼に入り950mbの低圧と静穏及び青空を観察しました。これを基にすれば3日には75km/h で南海、東海道沖を進んでいました。所で銚子沖に台風がかかる頃沿海洲から東進していた偏西波動（Westerly wave）の Trough （気圧の谷）は低気圧の発生を起こしながら北海道へ差かかつていました。台風が銚子沖で北東進を始めた16時頃からこの低気圧には急速な発達が起こつて670mbとなり18時釧路に達しています。然るに当時 San Pedro 丸の資料はなく且つ東北の東方洋上の資料が欠けていたために銚子沖の台風が一挙に北海道へ進んだとしたために出た見掛上の法外な速です。若し San Pedro 丸16時10分の位置から18時釧路迄の距離を1時50分で割れば時速400粁を越え全然考慮の余地のない異常な数値となりまして、この一事丈からも台風が銚子沖から更に San Pedro 丸遭遇点を経て釧路え急進したとすることの不合理が納得出来ます。

しかし、それかといつて台風や低気圧が銚子沖に出ますとよく類似の現象があり（即ち日本海に別にあつた低気圧が東北の東方、北海道辺りに達した頃急速に発達して一見銚子沖に出た台風或は低気圧が急進せる如く見える現象、この場合海上資料豊富なれば銚子北東洋上に台風或は低気圧の存在が認められます）現象的には台風或は低気圧が非常な速さで北海道え接近したと同結果となりますので全く間違つた進行の速さとも言い切れません。

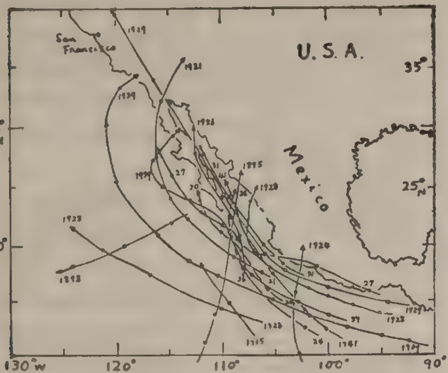
一般に異常な進行の速さを示した台風（低気圧も同じ）は後日詳細に吟味して見ますと大なり小なり上記と類似現象があり、一見台風の中心が途中を飛ばして進んだ如く見受けられることがあります。これを堀口博士によりRelay（リレイ）式進行といいます。要するに元の台風が進行中にその遙か前方に始め弱い低気圧が発生し、元のものがこの所え来る前に発達し元のものは弱まつて来るため資料が少ないと猛烈な速さで突進したかの感を与える進行の一つの Type で台風に限らず、低気圧にもあり、しかもよくありますので注意すべきと思います。

元からの台風や低気圧の動きに丈注目を払つている内に案外遠方と思われた自己附近に新生の台風や低気圧が出来て暴風雨圏に巻込まれる懸念があるからです。

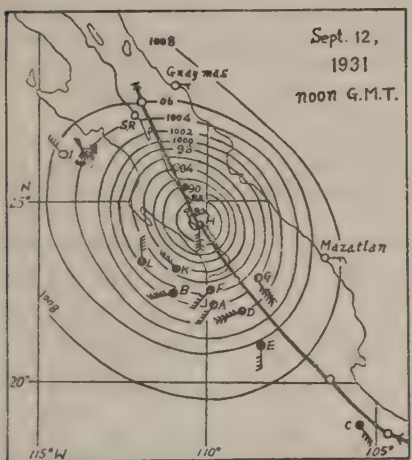
Hurricane（Mexico,中米の太平洋側の）

Mexico の Tehuantepec 湾とその東方洋上に発生するこの Hurricane は9月にその出現数が月1.9回の割となり年間最も多く発生します。才9図はその既往のものの内顕著なもののコースです、9月には1940年までの31ケ年に59ケの発生があり内36%は風力12が観測されています。進路は Mexico に接触する傾向が顕著と

なり California 半島から更に東に入るものが出現します。



才9図　9月の Mexico Hurricane の経路



才10図　La Paz 通過顕著 Hurricane

船名	最大風速	最低圧
A : City of Elwood	SSE 8	1002mb
B : Sfa Thrush	NE 10	997
C : Astronomer	S/W 10	973
D : San Raphael	SW 9	1000
E : Chattanooga City	SSE 8	1003
F : Muntropic	—	—
G : W. S. Miller	SE 12	995
H : Korrigan Ⅱ (at La Pas)	S 10	973
I : Presd. van Buren	—	—
K : San Felice	E 8	1000
L : Nebraska	—	—

(Monthly Weather Review 1931.IX)

既往の顕著例は才10図で次の記事が附随します。

6日発生　16°N, 98°W

9日　19.5N, 105°6W

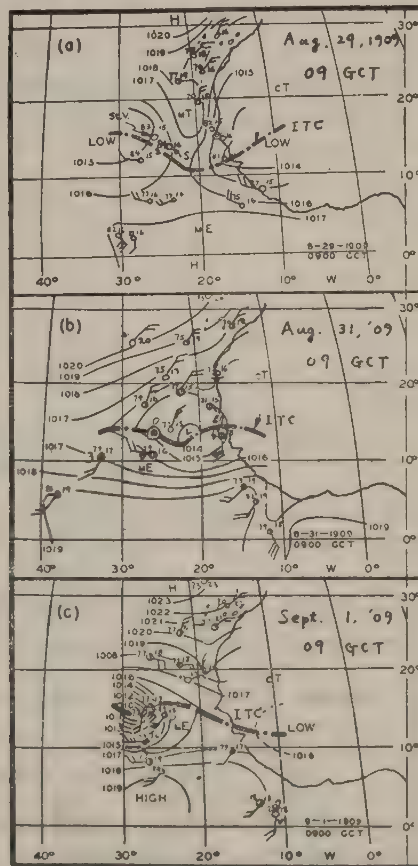
10日朝　Manzanillo の西方、同市 SE10

12日朝　S. S. Colowbia San Margarita 島にて坐礁、船体破壊さる、La Paz 2 a.m. N風力12

13日　Guaymas Santa Rosaliaに9呎の高潮溺死50

Cyclone

今月 Bengal 湾には 33 年に 5 ケ、Arabia 海は84年に1回、発生しているに過ぎません。Visher によればもつと弱い熱低は月一回位出現しています。発生が比較的多くなり強勢なも



才11図　Verde 岬附近発生の Hurricane と I.T.C.

I.T.C. 附近には中緯度前線の如く気温差はありませんが、前線独特の天気があり Squall を伴つています。但し、雲は Nb 系でなく Cu. Cb 系の対流雲となつています。(Piersig 1944)

のが出るのは10、11月でI.T.C.（赤道前線）が10°N 内外に南下せぬと発生、発達が促進されぬようです。

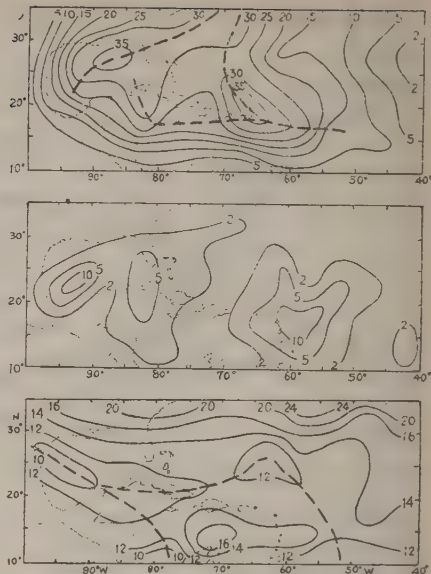
南太平洋のHurricaneと南印度洋のCyclone

未だ活動の時期に当らず、前者で35年に3ケ、後者で32ケ年で皆無となつています。

北太平洋の Hurricane

9月は年間最多数が発生し、1ケ月に2.4ケの割合となつています。発生区域も東方に拡がり遠く亜弗利加の西岸 Verde 岬附近で発生するものも加はります。この辺で発生するものの初期状況は才11図で示してあります。但しこの辺では中心示度は 1005mb.以下になることはありませんが、風力は Gale に達しますので中心気圧の浅さ丈で軽視は避くべきです（Coriolis 力が低緯度のため弱い。気圧傾度は小さくとも風は強く吹き得ますため）

次に Colone による統計諸図は才12、13図であります。



才12図　上　Hurricane 通過回数
中　同出現回数
下　平均時速（m/h）
太い点線は最低速度の点をつらねる線
いづれも5°梯形内の数、1887—1950年間の統計



才 13 図　　9 月 Hurricane の進行方向別頻度分布（%）　図の左上に%を測る同心円あり

25°N以南では WNW を中心とするW乃至NW方向に進みますが、30° 以北ではN～NEえ進む傾向が顕著、25°～30°は転向の起こり易い地帯と略言出来ましよう。但し一般に東方洋上のもの程転向点が北へ偏して来ています。

§4　南半球低氣壓概論

E. Vowinckel によれば、南半球の低気圧発生の地域別回数とその進行経路は14図で示されます。

図の説明と要約事項は次の通りです。

(1)　1ケ月間に発生する低気圧数は2ケ年の統計より求めた平均です。

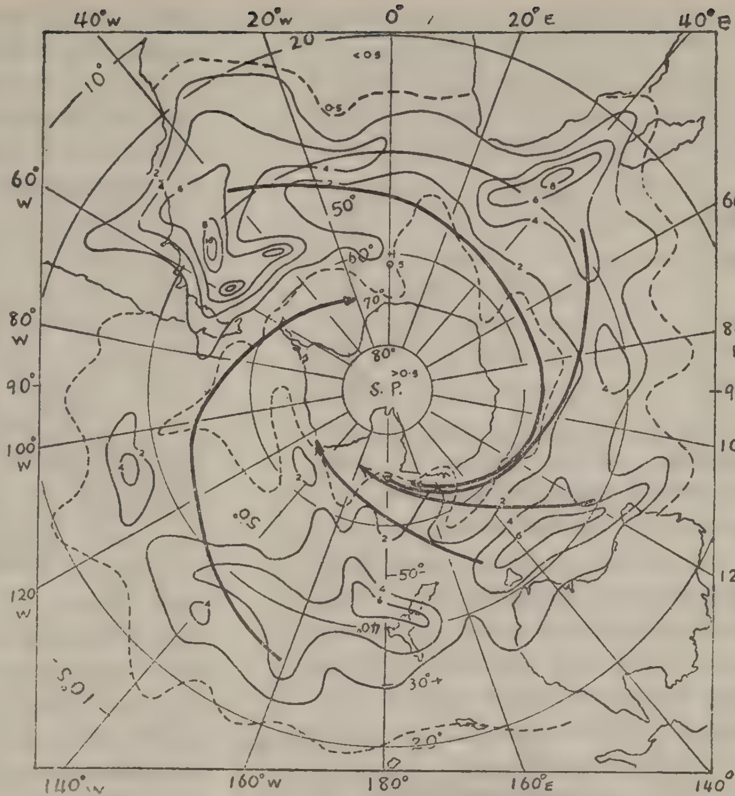
§4.1.　低気圧発生区域

(1)　Argentine沖に特に多発し、亜いで南亜の

南東沖、濠洲大湾から新西蘭に亘る洋上に多く、一般に 40°~50 S の圏内に発生多いが、頻度分布は南極を取巻いて一様ではない。

(2) Argentine 沖に多く智利側に少ないのは Andes 山脈により偏西風帯が南方え偏倚するためと考えられている。南亜の南東洋上の多発は、南大西洋と南印度洋の準永久高気圧の接触界面に当つています。

(3) 濠洲の冬期：高気圧が濠洲大陸南部に中心を置くため、印度洋と濠洲両高気圧の境界とする Trough が大陸の西部に多く、従つて低気圧発生も大陸西部附近洋上に多い。



才14図　毎月低気圧発生頻度（Vorwinckel）と低気圧経路
経緯5°梯形内の発生数

濠洲の夏期：冬期よりは東方の濠洲大湾上とその南方に発生する。

上記の事由で濠洲大湾上とその近傍洋では年を通じて低気圧発生が多い。

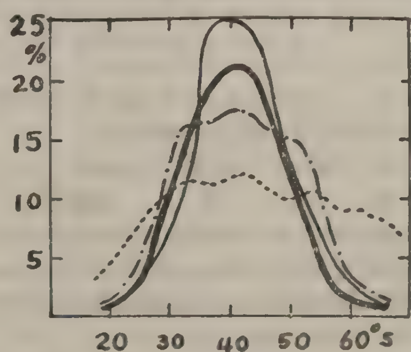
(4) 新西蘭近傍での多発は、定常的に存在する南太平洋高気圧間に出来る大規模な Trough がこの辺に位置し勝なためである。（次節 Fronts の項参照）

(5) 南太平洋東部では発生が少ない。年間を通じて恒久的に一つの大きな高気圧が蟠踞するためです。同一傾向が南印度洋と南大西洋の東部にあります。

§ 4.2. 低気圧経路

(1) 低気圧はいづれも ESE え進んで漸次発達し、極圏に至つて消滅する。但し濠洲発生のものは進行方向が ESE よりはもつと南方がゝる傾向がある。

(2) 緯度別に見た発生頻度は才15図で 42° S に

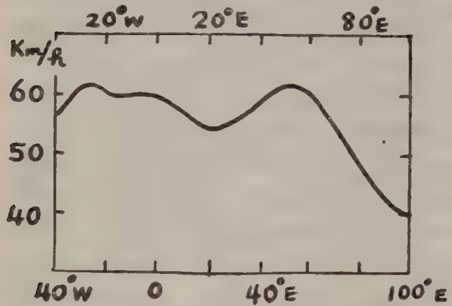


才15図　緯度別低気圧発生頻度

(1) E. Vorwinckel: Zyklonenbahnen u, Zyklogenetische Gebiete der Suedhalbkugel: Notos Vol. 2 No. 1~2 1953.

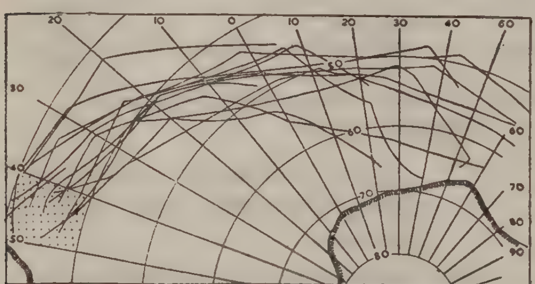
極大値があります。

(3) 平均の進行速度は南大西洋発生のものにつき図示すれば才16図で、60° E以東で急に速さが小さくなるのは極圏に近づき進行性を失い停滞性のものになる傾向が多いためです。



才16図 南大西洋発生の経度別低気圧進行速（km/h）

(4) 才17図は平均的経路で実際の個々の低気圧の経路は相当平均値よりはずれています。たとへば南大西洋でのものに付きますと才18図となります。東方程経路の少ないのは途中で消滅するものの可なりあることを示し



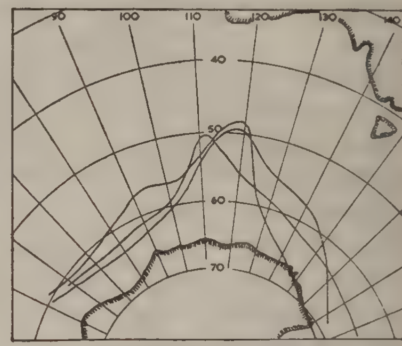
才17図 南大西洋における低気圧の経路集30～40° S，40～50° W発生の低気圧につき

ます。　表示しますと30～40° S、40～50° Wでで発生した低気圧（100％）は

0°	40° E	80° E	100° E
96	73	46	30％

となります。同一傾向は他の大洋で発生したものにもあます。即ち、太平洋発生のものはPalmer半島にかゝる以前或はWeddel海で殆んど消滅します。

(5)濠洲南方に現はれる特異な経路：濠洲の南方では才18図に示されるような低気圧の北東への逆行が現はれることがあります。これは濠洲南方に形成される Trough の影響によるもので北方に新低気圧が出来て、見掛上こんな風になるのではなく矢張り西から来た旧低気圧が Trough のために北進して発達し更にＳＥ～ＥＳＥへ進行しています。



才18図 濠洲南方洋上に現はれる低気圧異常進行経路

§ 4.3 Fronts

南半球では熱帯低気圧(Hurricane, cyclone)は殆んど出現しないが、非熱帯低気圧（通称低気圧）は前月に引続き中緯度以南の高緯度地帯には出現しています。

南半球の低気圧活動を支配する高気圧と、高気圧間に出来る Fronts につき概説すれば次の通りです。

南半球には三つの主な Front 系があり、夫々は次の如くなつています。

(1) Tahiti の南からＳＥへ延びる（南太平洋の準定常的な中緯度高気圧の南縁部に沿ひ）

(2) 30°乃至40° Ｓ間で南弗を横断し、南印度洋高気圧の南極側へ向けＳＥに延びる。

(3) La Plata 河口辺から南大西洋を越えて南弗の南方遙か洋上に延びるもの。

以上三つの重な Front 系は北半球のものと同じく線上に波動が出来て低気圧発生の母胎となります。即ち大体始め夫々の線上の低緯度地方に弱い低気圧が発生しＳＥに進んで南米の南端南弗南端遙かの南方洋上、或は濠洲、新西蘭の南方遙か洋上（50° Ｓ～60° Ｓ内外）に達した頃最も発達して強烈な低気圧となり、更に進んで次才に衰えやがて、南極大陸の縁辺で消滅します。（才17図参照）

上記三種のFront系はいわば平均的に見た概観で日々の現象としては平均位置からの偏倚があります。そのよつて起るのは永久的に洋上に蟠踞する高気圧の外に移動性高気圧があり（6.4日の週間で次の高気圧が来る）それの活動する区域（Pamer によれば濠洲から120°W辺の南太平洋に亘る区域)では、移動高気圧相互間にTrough(トラフ)が形成されて東進するからであります。Trough は60° S辺にある進行性低気圧に達しています。この Trough は寒冷前線型の前線を中央に伴い勝ちであります。この前線を時に Meridional front と称しています。

§ 4.4 Meridional fronts

Palmer(2)の研究によれば濠洲西部(近傍海上を含む）では天候の推移は Meridioral Front と密接な関係があります。

先ず Meridional front とはどんなものかをもつと実際的に述べますと、上記の如く二ケの中緯度高気圧（移動性の）の境目に出来る前線で大体子午線を絃とする弓状形をし、中緯度ではほぼ南北向きに走つています。そしてその構造的性格は寒冷前線型ですが、履歴と上層雲、風向変化降水現象から見て、寒冷型閉塞前線とされていまして、その元は南部印度洋にあります。

この Meridional front の一特徴は非常に長い区間に亘つて全体が寒冷型であつて、北半球の Polar front や Arctic front の様に所々に波状の起伏が出来て低気圧を伴い温暖、寒冷の両種前線が交錯してない事です。

又両高気圧間の境界は Trough と考えられ易いが、Trough の通過には微雨或は霧程程度の現象で大した大雨は降らないのに、濠洲西部では Meridional front の通過で1日量25mm以上の相当の降雨がある外両側気団には下記の区別があります。

温暖気団内（偏北風として前線え流入）

(イ) 露点が低い

(ロ) 下層雲がほとんどない、

(ハ) 対流性の雲（Cu,Cb）がほとんどない

(ニ) 好視程、対流がないからである

(ホ) 前線附近では22°～24°C（14地方時に）の高温を示す。

寒冷気団内(西乃至南西風として前線に流入)

（い）露点は低くない、濠洲大陸内でも然り

（ろ）上層雲多し、但し大陸侵入後は消散する、

（は）対流雲の各種が出現、沿岸では特に顕著で、降雨を伴う。

（に）前線附近で17°C（14地方時）

（ほ）視程は暖気団内程良好ではない。

又この前線通過に際してはN～NW風からW～SW風への風向の急変が伴う。

以上により明かにTrough ではなく前線であることがいへる。この前線もあまりにも北半球の Polarfront 式を考えて寒暖両種前線の交錯せるものとした濠洲在来の解析者は天気現象の説明に失敗しています。

即ち唯一種の Meridional front とすべきものを区別して所々に温暖前線を画いて（確たる観測の裏付けもなしに）失敗しているのです。

この Palmer の所論はあながち濠洲既往の解析例にとどまらず本邦にも若干その傾向（資料不充分なのにあまり Norway 学説にとらわれ過ぎて寒暖両前線を画き過ぎる。）があり、観測の重ずべきを示唆する見解として一考を払う要があります。

§ 4.5 濠洲東部から新西蘭

上記 Meridional front は130° E を越す頃から変質が起こり、40° S 以北の部分は北部程進行緩慢のため漸次東西向きとなり停滞前線化して来ます。

濠洲、Tasmania 海を越えてから後の動静は要約して次の如くなります。

A型　前線は解消傾向、弱くなる。時に40° S以北で顕著、但し南方部分は新西蘭を越す頃でも認め得る。

B型　全体が新西蘭に達するが北方部分は停滞性となり、後屈曲し波動状を呈し低気圧発生す。発生した低気圧は東進して新西蘭に至る。

C型　Tasmania 海で停滞し、やがて線上に低気圧発生E～SEえ進み新西蘭を越へ Chat-

(2)Synoptic Analysis over the Southern Oceans; New Zealand, 1942.

ham島の南で最高期を迎へる。（本誌第2号9～10頁、11～13図参照）この型は比較的頻発する。

D型　11～3月の Hurricane 季節には熱帯低気圧が北方から南下して Meridional front に接触し、更に勢力の増大が起り強烈な Hurricane となる。（濠洲と Tahiti 間洋上に出現する傾向顕著）

E型　濠洲東部で停滞性となり、大陸上にある線上に低気圧発生する。11～3月に多い型である。

F型　濠洲大湾洋上で低気圧が前線上に発生し Tasmania の南方に進行しつゝ発達する。

9月にはF型が多く、C型がこれに亜いでいます。（新西蘭、濠洲地方天気図より）が9月の低気圧はあまり優勢にはならない傾向があります。

§ 4.6　印度洋の低気圧

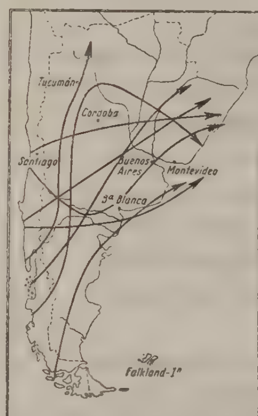
低気圧は前記のように南亜連邦の南東洋に発生しますが、発生初期は弱勢のもの故さして風力は強くはありません。これが発達するのはESEへ移行して Marion 島から東方での事故本邦の航路からは離れて来るので大した問題とはなりませんが簡略に次に注意すべき点丈に記述にとめます。

南印度洋の半永久的高気圧が優勢な場合には（主として南半球の夏）東西方向の気流（Zonal Current）が強くて南極圏の低気圧からNW方に延びる前線は前記 Meridional front 型となり、線上に屈曲が出来ず（即ち安定で低気圧の発生がない）、反対に弱いときには（主として冬）前線は本邦附近の Polarfront の如く所々波状に屈曲して新生の低気圧が出現します。

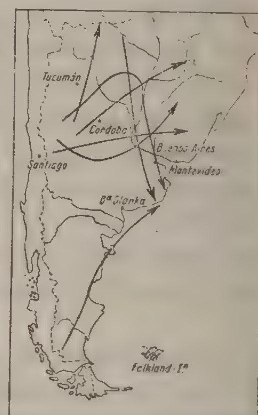
§ 4.7　南米の低気圧

南米の La plata河のSEに延びる Front の存在で南米のSE洋上が低気圧発生の多い区域になることは前記せる所ですが、こゝに発生する低気圧はESEに進みながら発達し南極圏に到つて止むものであるため南米の Argentine, Brazil等諸国はこの系統の低気圧の圏内に入ることはありません。

Argentine を襲う低気圧はこれとは別系統のもので N.A. Hessling によれば次の結果が出ています。（高気圧も参考上オ19図に示しました）



オ19図　高気圧の進路



オ20図　低気圧の進路
（N.A.Hesslingによる）

高、低気圧出現数　(1913～1922年統計)

高気圧 始めて現れた場所	夏	秋	冬	春	低気圧 始めて現れた場所		夏	秋	冬	春
35° S 以北	5	15	48	17	25～35° S	65～70° W	119	65	38	109
35° ～ 40° S	68	105	91	93	25° S以北		8	17	34	25
40° ～ 45° S	60	41	36	53	25～35° S	65° W以東	5	21	25	15
45° S 以南	28	16	25	31	35～40° S		10	0	1	7
					40° S以南でNE進せるもの		12	5	8	5
総数	161	177	200	194	総数		154	108	106	161

夏：12.1.2月、冬6.7.8月

しかしいづれも弱勢なもので、とうてい洋上を進む低気圧の如き暴風を伴うものではありません、気圧の変化も低気圧通過より寧ろ、高気圧によるものの方が大きいのを見ても明かでありましよう。

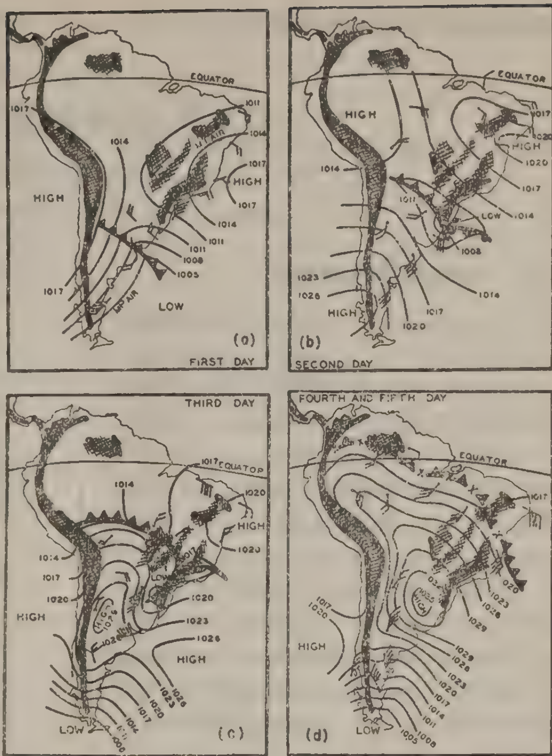
高気圧は一日 1000km の平均で東進します。

Friagems

Argentine から Brazil にかけて起こる独特の風で弱い低気圧に伴うものでこゝに述べます。

Friagems とは Andes 山脈から Brazil 高地 Amazon 盆地南部間に吹く異常に寒冷な風で南極圏より吹走し来れる海洋性極気塊の吹出しに付けられた称であります。

出現は普通4月〜10月です。南大西洋の高気圧が東進しますとその背後に寒冷な mPk 気塊が北進してこの現象となります。そのときの天気図状況の変遷は才21図aからd 迄であります。



才21図　Friagem を示す天気図状況の変遷 (Serra-Ratisbonna)

(a) 極気塊の汎濫が Brazil 東部にある高気圧の東進につれて Argentin 南部に出現、(a) (b) で出来た Front が波状となり低気圧が形成される、(c) Front の一部は閉塞する。(d) friagem は低緯度に達し消滅に瀕す。

Friagram の到達前には気温は高温多湿となり通過後は極度に低温乾燥となります。前線附近には雄大な Cu や Cb (積乱雲) が発生し雷雨さへ伴うことがあります。前線通過前には強い前線性降雨があり、後には微雨があります。又場合によつては (前線の進行の速さが緩やかなとき) 前線通過後に霧が発生します。

5 霧

北太平洋北部三島より北米 California 沿岸に亘る霧の常習発生地帯では9月になると全般的に可なり出現が減少して来ます。最高頻度は千島中部により23%で前月の50%に比し½以下となつています、大体全区域を通じ9月は8月の½乃至⅛以下と減少しています。たゞ北米の California 沿岸では最高16%で前月の24%に比し減少が比較的小さいのは注意をひきます。北緯 35° 以南では California 沿海を除けば霧は稀であり 30° N以南では先ず無いといえます。

南太平洋では 35° S 以北には殆んど発生しません。40° S 以南では霧に出合う確率が5〜10%となります、その地区は散在的で何処でもというわけではありません。New Zealand の南東部は最多し10% 以上に及んで来ます。

南 Africa ほか Madagascar の南方海霧出現 (42°〜48° S) は5%以上 (最大10〜15%の区域を含む) が存在します。

この外北大西洋の35°〜40° N以北には1%以上の区域がありNewfoundlandの東方に15%を越す海域でその極に達して居ますが矢張り 7.8 月に比しぐつと出現率は減つています。Biscay 湾から英吉利海峡にかけて5%〜10%の区域があります、南大西洋では La Plata 河近傍からその沖合かなりのところまで5%以上の海域が存在します。

要するに海霧は寒[illegible]気の接触する所に発生するので、赤道から中緯度北方の低い方で単

に暖流丈あり海霧の発生は絶無か或は極く稀に局所的にあるに過ぎないといえるようです。

日本及びその周邊の氣象概況　昭和30年5月*

On the Summary of the Meteorologial Conditions in the neighbourhoud of Japan in the May, 1955.

§1　日本附近の気象概況

今月の本邦附近は高、低気圧の去来が頻繁で低気圧は特に強烈なものは無かつたがやや強いものが日本海と南岸沿いで東進している。移動性高気圧は、回数は多いが差程優勢なものは少く、むしろシベリヤ東部からオホーツク海を経て南下するものが顕著で、この様な高気圧は太平洋にきて強まる傾向があり、之が更に本邦の南方海上に張出し時には比島にまで及んだ。

上旬　日本近海を東進する低気圧の去来にはほゞ4日位の週期があつて先月末から今月1日にかけ本邦南岸沿いに1000mbの低気圧が東進して全般に雨を降らせた。伊豆近海では風速17米/秒位の強風が吹き、通過後は関東沖でもNE17米/秒の強風が見られた。

低気圧は関東東方海上で発達986mbに達しアリューシヤン附近に向つた。この通過後はシベリヤ東部から高気圧が南下して一時天気は回復したが、2日には東支那海に低気圧が現われ3日～4日に本邦の南方洋上と日本海に二つ玉型で東進した。低気圧が西日本に接近する頃から前記の高気圧優勢な為、低気圧の動きがおそく然も低気圧の前面で、気圧傾度が可成り急なため、やや強い東寄りの風が連吹、殊に三陸沖では20～25米/秒の烈風が吹走した。これは、140°Eを通過する頃が最盛期であつたが、それでも1000mb位のものであつたが、気圧傾度が大なるためである。

7日～9日は本邦附近は前線帯となり、前線上を小低気圧が移動し風の弱い曇天勝ちの天気が附随した。

中旬　上旬末から小笠原方面の高気圧が強く南方海上を支配していたが黄海に発生した低気圧が11日～12日に日本海を通過し本邦附近は南高北低型の気圧配置となり、太平洋沿岸ではやや強い南西風が吹いた。その後大陸からの移動性高気圧が来て本邦の天気を支配し16日頃まで割合天気は好かつた。然しこの高気圧が東方海上に去るとシベリヤ東部から南に伸る気圧の谷が東進し、この谷中に低気圧が発生、18日本邦南岸沿いに発達しながら東進、更に三陸沖から千島の南方にぬけた。

下旬　東支那海と黄海に発生した低気圧の中前者が四国沖を通る頃（20日）が最盛期で1000mbを示し全般に雨を降らせ風は15米/秒内外で東進するにつれ衰弱した。その後オホーツク海より高気圧が日本海に南下し前線帯が太平洋高気圧との間に生じ、オホーツク海高気圧が強いため、前線は南下し低気圧は30°N以南を通る事が多くなつた。（21日～24日）（25日～27日）、然し共に弱いもので、この前線は梅雨前線の魁となるもので27日東支那海と黄海東部に現われた低気圧と共に北上して6月に入り本邦に梅雨現象をもたらしている。27日の低気圧はやや強いもので、日本海と南岸沿いとに二つ玉型で東進（29日）し、一つは北海道附近で他は北海道東海上で弱まつている。

（井野予報官）

§2　低　気　圧

本邦附近で発生した低気圧の数は可成り多いが、その発達程度は前月よりも更に弱かつた。中心示度970mb以下を示したものはアリューシヤン列島附近で僅か1個に過ぎない。然し一昨年5月にも北海道附近より千島、アリューシヤン列島にかけ極度に発達し北海道近海で幾多の遭難船を出した低気圧例もみられ、本邦東方洋上では未だ警戒を要する月である。又、本月には、千島、カムチヤツカ、アリューシヤン附近

* 気象課、調査課

及びその南方海上では屢々低気圧附近で濃霧の発生を見るようになるのも注目すべきである。

以下、各海域別に低気圧の動静を述べる。

(1) 黄海及び日本海附近

本月中に同海域で発生した低気圧は数個あるが、いづれも日本海を北東進して北海道附近に到達、その大部分のものは大して強くもならず同附近で消滅しているが、6日、日本海中部で発生したものもアリューシャンに進んだが大して発達もしなかつた。

(2) 東支那海及び本邦南岸附近

同海域で発生した低気圧は数個を算えるが、いづれも本邦南岸に沿つて東進し遠州灘附近より北東進して本邦東方洋上に出ている。1日(土佐沖)17日(東支那海)で発生した2個の低気圧はアリユーシヤン列島に達しているが特に前者は本邦東方洋上で発達(中心示度980mb)した。

(3) 本邦東方洋上

この海域で発生した低気圧は4個あり、いづれも北東進するに従つて発達しアリユーシヤン列島附近に達している。最も発達したものはアリユーシヤン附近で990mbを示した。(2)の海域で発生したものも本海域を通過するので、通過数はかなり頻繁となる。本月、最も警戒を要すべき海域となつている。

(4) オホーツク海及び千島、北海道北部附近

シベリヤ大陸で発生したもの及び(1)のものが数個通過したが、いづれも弱かつた。

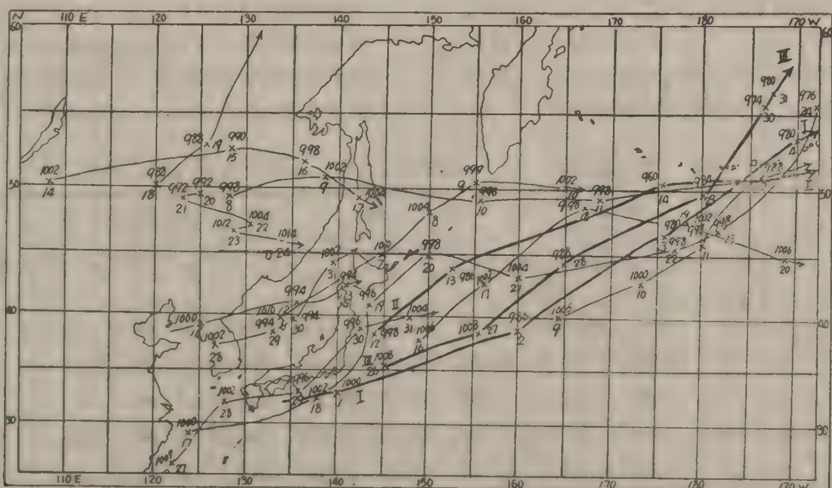
(5) カムチヤツカ及びアリユーシヤン列島附近

(1)~(4)で発生したものが多くこの海域に発達した姿で到達した。1000 mb 以下の中心示度を示したものでけでも8個あり、その内の最深は960mbである。

§3. 顕著なる低気圧

(I) 5月1日、本邦南岸沿いの前線上、土佐沖で発生、当初の中心示度は1002mb であつた。同日15時には銚子沖に進出し急進しつつ(35~40ノツト)発達し、翌2日9時には 38° N、159° E に達して986mbを示し、南西象限では、25米/秒 以上の烈風を吹走せしめた。その後は進路を北東にとり一時衰弱したかの様に見えたが、3日に入つて更に発達、4日3時にはアリユーシヤン列島中部に達して972mbを示しその最盛期に達したようである。以後漸衰しベーリング海西部に入り、5日アラスカ方面に去つた。

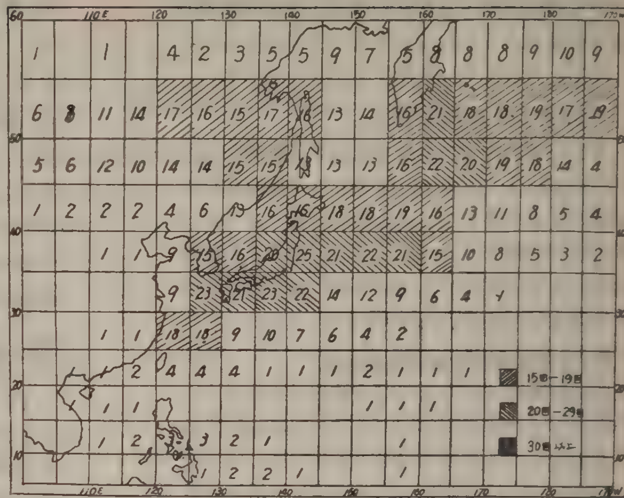
(II) 5月12日、石巻東方海上で発生、徐々に北東に進行しつつ発達、翌13日9時45° N、156° E にあつて986mbを示した。その暖域内で



第1図　昭和30年5月低気圧、台風の経路図(1000mb以下のもの)

は、かなり広範囲に濃霧が発生している。その後、尚も発達を続け14日15時アリューシヤン列島中部に達し960mbを示すに至り、中心よりのびる前線附近では 25米/秒以上の烈風を吹走せしめている。15日も、この状態で同列島沿いに東進した。

（Ⅲ） 5月26日、父島北東洋上30° N、147° E で発生、翌27日には1008mbの示度で38° N、156° E附近を経て発達しながら北東進した。28日9時45° N、166° E で 988mbとなつた。28日より29日にかけて濃霧の発生を見ている。29日15時アリューシヤン列島中部に達し980mb、30日ベーリング海にあつて974mbとなつた。この前後より次オに減速して31日には殆ど停帯、徐々に衰弱の色を示した。



オ2図 低気圧（台風を含む）の5°梯形内通過数（5ヶ年内）

昭和30年5月における本邦及び東方洋上附近における低気圧経路をオ1図に又、最近5ヶ年間における低気圧通過回数はオ2図である。

§4. 各船舶からの海上気象報告

本月中に各船舶より神戸海洋気象台に寄せられた船舶気象報告は日本沿岸航路1通、沖縄航路5通、北支方面1通、北米航路7通、南方航路24通、南太平洋航路1通の計39通であつた。

日本沿岸航路で観測された最低気圧は乾昌丸の997.0mb（12日）、最大風力は同船のNE 6（1日）沖縄航路では最低気圧を白竜丸が1003.3mb（20日）、最大風力を新興丸がNE 7（31日）北支方面ではオ二馬来丸が最低気圧1006.5mb(19日）、最大風力SSW 6（19日）、北米航路では最低気圧を高幸丸が982.0mb(15日)最大風力を乾洋丸がSW10(1日)、高幸丸がW10(15日）、南方航路では最低気圧を千山丸が1000.5mb（11日)、最大風力を藤川丸がNE 7（13日）辰宮丸がENE 7（24日）、南太平洋航路では最低気圧をがんぢす丸が 1010.0mb、最大風力を同船がWNW 3と、それぞれ観測している。

オ1表に各船舶において本月中に観測された暴風観測表（風力8以上）を、オ2表に各船舶の最低気圧及び最大風力の観測表を示し、貴重な観測資料を御提出願つた各船舶に対して深く感謝の意を表します。（三宅技官）

オ1表 暴風観測表 （1955年5月） 時刻はG.M.T.

船名	暴風		最強風					最低気圧		暴風	
	始日	風向	風向風力	日	時	位置 緯度	位置 経度	気圧	日 時	終日	風向
乾洋丸	4月 30	SE	WSW10	1	06	46.0N	170.5E	985.0	4月 30. 15	2	W
乾洋丸	2	WNW	W 8	3	03	43.9N	163.4E	1014.0	3. 03	3	W
めきしこ丸	7	NW	NW 8	7	00	43.2N	170.0E	1020.5	7. 00	7	W
高幸丸	14	S	W 10	15	00	48.2N	169.7W	982.0	15. 00	16	WNW
向日丸	28	SSW	WNW9	28	06	37.5N	161.2E	1004.2	28. 00	28	WNW

各船舶からの海上氣象報告　（1955年5月）

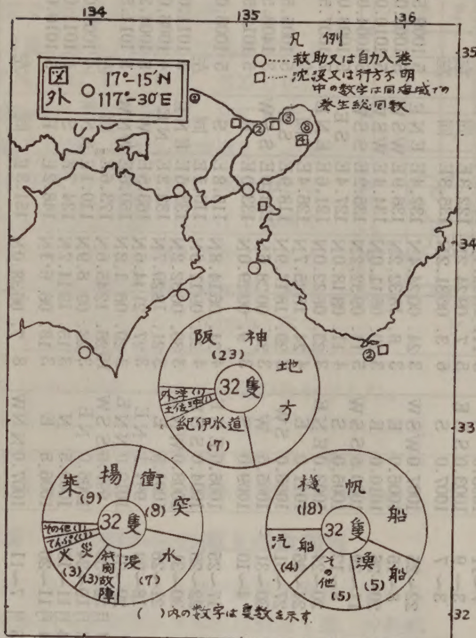
第2表　Report of Ship's Weather Observations. (May 1955)　時刻G.M.T.

船名	会社名	船長	担当者	航路 自	航路 至	航海期間 1955年	最低 気圧	その時の 風向	その時の 力	観測 日時	観測位置 緯度	観測位置 経度	最大風力 風向	最大風力 力	その時の気圧	観測 日時	観測位置 緯度	観測位置 経度
乾昌丸	乾汽船	小山 信	矢口 毅次	京浜	室蘭	1~31	997.0	NE	4	12. 06	37.8N	141.5E	NE	6	1006.0	1. 03	35.5N	140.8E
白龍丸	大阪商船	南 与策	三原 良昭	那覇	東京	1~31	1003.3	WSW	4	20. 11	35.1N	139.1E	NE	5	1013.3	31. 15	30.4N	130.3E
新興丸	関西汽船	清家 侃	赤瀬多喜雄	門司～高雄	東京	21~31	1006.5	ENE	4	30. 21	25.3N	123.4E	NE	7	1010.5	31. 03	28.4N	127.1E
第二馬来丸	八馬汽船	本田 虎雄	花岡 義美	伏木～上海	大沽	17~31	1006.5	SSW	6	19. 12	32.1N	124.7E	同	左				
乾洋丸	乾汽船	小野 健	大綱 正司	カナダ	京浜	1~6	993.0	SW	9	1. 00	46.4N	171.2E	SW	10	995.5	1. 06	46.0N	170.5E
めきしこ丸	大阪商船	安藤 純一	航海士	紐育	神戸	5~10	1007.0	SSE	5	8. 12	40.7N	158.5E	NW	8	1020.5	7. 00	43.2N	170.0E
高幸丸	大同海運	高橋 朓	〃	ロスアンゼルス	横浜	8~21	982.0	W	10	15. 00	48.2N	169.7W	同	左				
向日丸	〃	花田 広務	横尾 英二	小樽	ポートランド	1~4	1040.0	S	6	3. 12	47 6N	141.8E	同	左				
向日丸	〃	〃	〃	ポートランド	横浜	14~31	1004.2	SSW	8	28. 00	37.5N	161.7E	WNW	9	1005.2	28. 06	37.5N	161.7E
ぱなま丸	大阪商船	奥山 鉄茂	巻島 勇	紐育	日本	29~31	1014.0	SW	8	29. 03	46.5N	179.8E	W	9	1018.5	31. 15	45.9N	176.2E
高昌丸	大同海運	田中 晴一	航海士	Anakan	大阪	1~2	1009.0	SE	3	2. 09	29.9N	132.8E	E	6	1009.0	2. 18	31.5N	133.4E
ろんどん丸	大阪商船	山崎	北野	釜山	ダンガン	1~6	1009.0	E/S	3	5. 09	7.0N	108.1E	ENE	5	1013.0	4. 03	13.2N	114.3E
ろんどん丸	〃	〃	〃	ダンガン	門司	12~18	1008.0	ESE	1	14. 21	9.8N	110.9E	SE	4	1008.0	12. 15	5.2N	104.9E
高長丸	大同海運	小島 利行	南 彝光	ダンガン	八幡	2~7	1006.5	E	4	3. 09	12.6N	112.5E	E	5	1011.0	5. 06	19.2N	120.3E
千山丸	宮地汽船	岡野芳之助	浅野 朝治	比島	名古屋	1~7	1008.5	NE	4	1. 21	14.1N	126.8E	E	5	1011.0	7. 06	32.2N	133.6E
藤川丸	川崎汽船	原田 喬	酒井 美明	八幡	カンファ	1~2	1007.0	SW	3	1. 21	17.9N	109.2E	N/E	4	1010.0	1. 06	18.3N	111,3E
藤川丸	〃	〃	〃	カンファ	伏木	9~17	1002.6	SE	6	9. 21	18.5N	107.9E	NE	7	1012.2	13. 06	22.0N	116.8E
新興丸	関西汽船	清家 侃	赤瀬多喜雄	Abulug	名古屋	7~11	1003.0	S	3	11. 18	32.4N	134.9E	SSW	5	1006.0	11. 09	31.3N	134.0E
ひまらや丸	〃	大坂 総進	米原 道正	盤谷	門司	3~9	1003.0	SSE	5	7. 09	24.2N	122.3E	同	左				
明天丸	明治海運	上杉 春三	江上 龍夫	清水	ダバオ	3~7	1007.0	S	6	3. 06	31.2N	135.3E	同	左				
明天丸	明治海運	上杉 春三	〃	パラン	名古屋	22~25	1007.0	WSW	3	24. 00	24.4N	132.4E	ENE	5	1009.5	24. 12	25.9N	132.8E
乾瑞丸	乾汽船	川井 源一	坂田 博	名古屋	アンガウル	8~15	1006.0	E	3	8. 18	32.2N	136.9E	WSW	5	1008.0	9. 06	30.5N	136.7E
乾瑞丸	〃	〃	〃	アンガウル	日本	20~26	1010.0	E	3	20. 06	11.0N	134.4E	WSW	5	1010.0	24. 06	24.8N	134.4E
千山丸	宮地汽船	岡野芳之助	浅野 朝治	名古屋	ブツアン	11~29	1000.5	SSW	5	11. 09	32.2N	135.2E	SSW	6	1004.0	11. 18	31.6N	131.9E
高昌丸	大同海運	田中 晴一	航海士	東京	タラカン	8~12	1005.0	S	4	11. 08	18.0N	127.4E	SE	5	1008.0	10. 12	21.4N	130.2E
辰宮丸	新日本汽船	藤田 正夫	小松 勝利	ラングーン	東京	20~24	1003.0	ENE	3	23. 06	22.0N	121.6E	ENE	7	1007.5	24. 06	26.4N	125.1E
ろんどん丸	大阪商船	山崎 実	喜多野武治	八幡	ザンボアンガ	24~26	1011.0	E	4	24. 18	25.7N	126.4E	同	左				
さばん丸	乾汽船	帯田 久男	浜部 秀一	シンガポール	横浜	27~31	1003.0	SW	2	29. 18	17.9N	118.9E	SW	5	1005.5	28. 06	12.3N	113.6E
明天丸	明治海運	上杉 春三	江上 龍夫	名古屋	シンガポール	30~31	1005.5	W	3	30. 00	28.6N	134.6E	SSW	3	1408.5	31. 06	24.3N	132.2N
山村丸	山下汽船	伊東征五露	航海士	ボルネオ	名古屋	4~10	1009.0	S	3	9. 00	29.0N	133.0E	E	5	1012.5	4. 18	16.1N	126.0E
山村丸	〃	〃	〃	大阪	BatuPahat	17~25	1006.0	ESE	4	24. 06	14.8N	115.8E	S	5	1008.0	24. 06	15.5N	116.6E
ひまらや丸	関西汽船	大坂 総進	米原 道正	神戸	盤谷	22~28	1004.0	SSW	4	28. 09	11.6N	110.1E	同	左				
乾瑞丸	乾汽船	川井 源一	坂田 博	大阪	ララツプ	30~31	1008.0	WNW	3	30. 06	32.2N	133.6E	ENE	5	1011.0	31. 09	28.7N	128.7E
乾栄丸	〃	新藤 光造	航海士	日本	比島	21~26	1004.5	E	3	21. 18	29.7N	133.3E	NE	4	1008.0	22. 00	29.0N	133.0E
昭川丸	川崎汽船	矢代栄太郎	〃	Balboa	新潟	18~29	994.1	NE	3	27. 21	44.6N	163.5E	W	8	1004.2	23. 18	45.8N	169.1W
がんぢす丸	大阪商船	佐藤 常吉	村上貞太郎	Tomo	Nahama	29~31	1010.0	NNE	3	29. 06	1.2N	150.6E	WNW	3	1011.5	29. 12	2.1N	150.3E
向日丸	大同海運	花田 広務	横尾 英二	小樽	ポートランド	4月22~30	997.9	SSW	10	26. 12	45.6N	173.6E	同	左				
さばん丸	乾汽船	帯田 久男	浜部 秀一	玉野	ラスタヌラ	3月19~24	1006.0	NE	3	23. 09	8.9N	110.1E	NNE	4	1009.0	22. 06	13.0N	114.5E
山村丸	山下汽船	伊東征五露	航海士	八幡	ボルネオ	4月11~15	1009.5	N	3	15. 12	14.7N	124.7E	S	4	1011.0	12. 18	23.3N	128.7E
がんぢす丸	大阪商船	佐藤 常吉	村上貞太郎	門司	Noumea	4月11~20	1006.5	E	3	18. 06	6·1N	148.2E	E	5	1016.0	12. 12	25.9N	136.3N
あめりか丸	〃	田島 信生	航海士	神戸	ロスアンゼルス	3月7~11	1007.0	NNW	8	7. 06	38.0N	151.3E	同	左				

昭和30年6月における海難状況

The marine disasters occured in June, 1955

当管内の6月の海難状況については才1図に示すとおりで相変らず海難の多い地域は阪神地方で4月の状況と良く似ている。本月の海難の特徴として衝突隻数が乗揚隻数に比して前月と同様に比較的多かつた点が挙げられる。（才5管区海上保安本部）



6月の海難事故について事故原因が気象要素に因ると思はれるものは13隻で要素別に分類すると次のとおりである。

気象要素別		隻数
1、強風	前線	8
2、強風	低気圧	3
3、高気圧周辺部		1
4、視界不良（もや）		1

事故発生当時の天候別（事故船観測）

1	風　力	0 1 2 3 4 5
	回　数	0 3 5 1 1 3
2	風　浪	0 1 2 3 4
	回　数	1 6 2 3 1
3	うねり	0 1 2 3
	回　数	3 5 1 4
4	視　程	2 3 4 5 6 7（良）不
	回　数	1 0 4 3 1 0 3 1
6	天　気	快晴、晴、曇、雨
	回　数	4　2　4　3

（神戸海洋気象台　西野）

昭和30年7月群発台風速報

異常な傾向を辿つた梅雨のあとを受けて、既に6月下旬より著しく発達した小笠原高気圧は7月に入りますます増強して完全に夏型の気圧配置が本邦からその近海を支配して来ました。このため各地点共天気良く又気温の上昇著しく気候的にも盛夏の状況を呈して来ました。初旬中頃から一たん北上した梅雨前線の南下がありまして5～9日は再び梅雨天候が現われましたが10日以降は全く前線が解消しまして中断された夏型天候が前にもまして勢力を振い始めました。

梅雨気が完全に払拭されると同時に才7号台風を魁として続々と群生し、次表のような経過を以て月を終へました。

The Kōbe Marine Observatory

Journal of Oceanography

2nd Series Vol. 6 No. 4

CONTENTS

Meteorological Conditions in the North Pacific and the other Oceans in September

On the Summary of the Meteorological Conditions in the Neighbourhood of Japan in May, 1955

The Marine Disasters occured in June, 1955.

Published by

THE KŌBE MARINE OBSERVATORY